

〈寄稿〉

イラスト：タナカカツキ

文：伊藤ガビン

ひっそりと消える

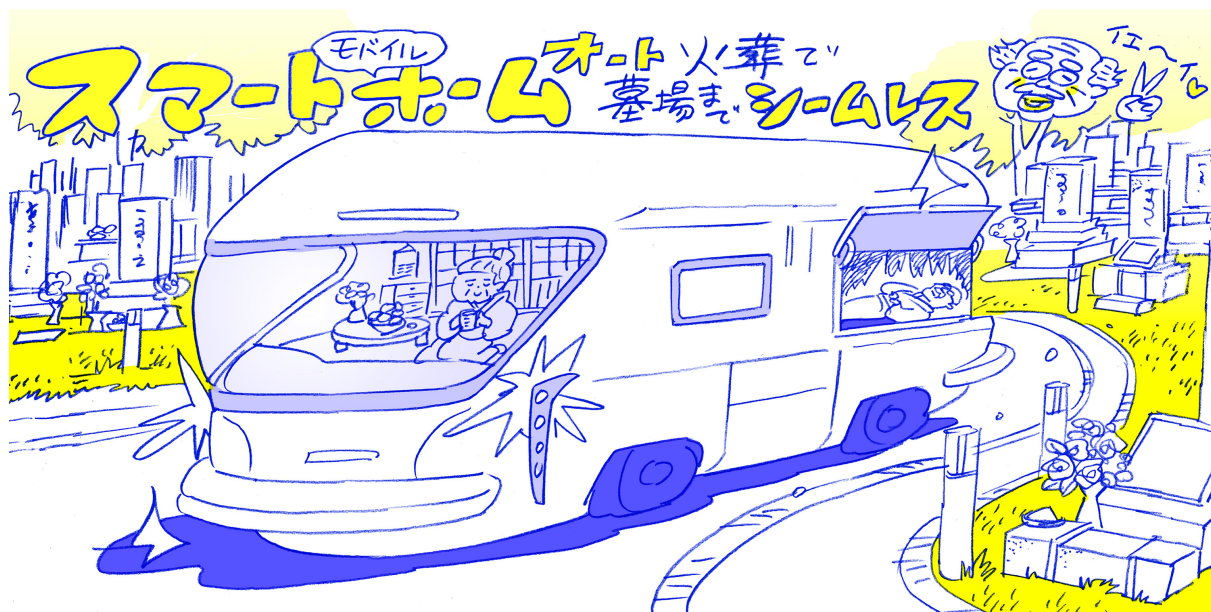


Figure 1. スマートモバイルホームのイメージ。

老いていくことをただただ観察する日々を綴った書籍『はじめての老い』の著者である伊藤ガビンさん。60歳を超えた著者が考える、生物学的な老いのゆくえとこれからの老いについて、おばあさん仮説やヴァიმ・ヴェンダースなどを絡めた令和の老いエッセイ。

こんにちは、伊藤ガビン (62) です。

(62) は背番号ではなく年齢です。

今年の春に「はじめての老い」という本を出してからというもの、仕事の依頼が「老い」に関すること8割くらいになっているんですよ。

本の中では何度か触れているのですが、62歳という年齢はカテゴリー的には前期高齢者にも入れてもらえない、老いの予備校生みたいなポジションなんです。ですから老いについて語ることなどおこがましいのですが、背伸びして書いております。

さて『文化と生物学』という媒体ですから「生き物」っぽいことを書いてみたいのだけど、そのあたりの知識はまったくありません。

しかしながら私が老いについて書く時の目線は、自分自身の身に起こっている老いの「観察」でありますので、小学生の自由研究くらいのものにはなるかもしれません。そこらあたりで勘弁してください。

ところで、ですね。

本を出しますと、よく中身を読んでない人が雑に紹介文を書いてくれたりするんですよ。曰く「老いをポジティブにとらえている」「老いを楽しん

でいる」というようなことが紹介文が書かれます。ポジティブでもなけりゃ、楽しんでもいいねえわ！と思うんですが、仕方ない。誰もが、人の本なんかろくすっぽ読んじゃないわけです。

では、どういうスタンスで書いているのか？私の基本的なスタンスは老いを「ただの変化」として、それを「観察」の対象にしているわけ。ただ。それだけ。

老いの道を歩む、路上観察記である、とそう書きました。

つまり老いに関しては、フラットな立場でありますよ、という表明ですよ。

なのですが。

本が出てからですね、少し心境に変化があって、もうちょっと「老い」を「正しいもの」として扱ってもいいんじゃないの？と思いはじめていたりします。生き物として老いてポンコツ化していくことには理由があって、そこに希望があると。これ書くと「ポジティブじゃん！」と言われそうで怖いんだけど、ポジティブとも少しだけずれた立ち位置なのです。

あの一、「おばあさん仮説」とか「おばあさん効果」ってやつがあるじゃないですか。哺乳類として例外的に閉経後の寿命が長い理由を説明しようとするやつですよ。あってますか？知らない人は各自調べてください。

あれは一、共同体にとって、閉経したおばあさんになることの存在に価値があるという意味での、希望とも思えるんだけど、私がサッコン感じていることは、もうちょい違っててね。例えばですよ、例えば、いわゆる「キレちらかす老害」になること。すごいやなんだけど、あれもまた

なにか必要な振る舞いなんじゃないかなと思ったりもしています。

つまり、しかるべきタイミングで「うざい」「老害」「この場から去れ！」という存在になることもまた、ヒトとして必要なことなのかな、みたいなことです。

ウザがられることによって社会から消えやすくなる機能とか？

老いることをそんなふうにとらえると、握力がなくなったり、歩くスピードが遅くなったり、シワシワになったり、食べかすが歯にはさまったりすることもまた、ヒトとして正しく一步一步進んでいるような気にもなってくる。臭くなってくるわたし、それは動物として正しい。とかね。

なのですがちょっと前にね「最近キレやすくなったよね」と妻に言われました。

言われた瞬間「そんなバカな！」とキレそうになりまして「あ、これか？」と気付いた形になります。

これもまた正しい変化ともとれなくもないわけですが、同居している家族からしてみれば、鬱陶しいだけでありますから、困ります。なんとかしなけりゃならない。老人がキレやすくなる理由は脳の萎縮やらなんやら、複合的な理由があって避けられないことなので、それを少しでもマシにしておかなくてはならない。

生活習慣を改善して体調を整えたり、感情がズワッと動いたりした時にそれが落ち着くまで数秒間カウントしたり、など対策をとっていかなくてはならない。

がんばろうわたし。

とはいえ、いつかキレ散らかす老人になることは、これはもう避けられないことではある。キレ散らかして、家族から嫌われたまま死にたくないのだから、どうしたらよいのだろうか。

医療がこのまま高度に発達してしまうと、ただ寿命だけが延びて非常にやっかいなことになる。かといって尊厳死などといって自ら死を選ぶことだけが、選択肢になると、それはそれでしんどいのである。

「猫は死を見せない」という俗説がございますね。かつて半野良状態で飼われることが多かった猫は、弱ってくると、どこかに身を隠し、そのまま息を引き取る。人はその死を見ることができない、というような。

あれにちょっと憧れちゃうところあるのよね。

ガビンさん、何日か見ないね。

くらいのこの世からの消え方。

これが現在可能なのだろうかと考えると、一番近いのは独居老人の孤独死というやつが視界に入ってきます。あれは、死体の処理などでさまざまな人に迷惑がかかるし、警察もやってきたりして美しくはない。

美しくないのだけど、少しだけ憧れる。うまい落とし所はないものなのか？

なんかこう、独居で死ぬと、壁がパッカーンと空いてロボットアームが出てきて、きれいに処理してそのまま火葬されて、各種届け出もされるようなことはできないのだろうか。いやいや、それだと不動産関係の人にも迷惑がかかるので、モバイルホームとかがよいかもしれない。ヨボヨボ老人向けのモバイルホーム。パタリと死ぬと自動運転で火葬場まで運んでくれるし、実に効

率がよい。できる気がしてきたぞ。

そういえば鴨長明の『方丈記』ってやつは、そういう話だった。

隠者となった鴨長明が暮らした方丈庵は、柱と薄い壁だけでできていて、定住しないスタイル。現代で言えばモバイルホームのようなものだった。

都を離れて、山里に暮らして、ひっそりと死んでいくというね、そういう話でしたね。あれしかも災害を契機にそういう暮らしにしたわけで、そこもワカルワ〜とも思わないでもない。

ただ、わたしは鴨長明のようにになりたいかといえ、まったくそういうわけではない。自給自足な感じと、削ぎ落とした暮らしぶりがかが、ミニマリストっぽくてちょっと嫌なんですよ。長明、友達になれない感じがしますよ。

ヴィム・ヴェンダースの『PERFECT DAYS』とかも、役所広司の暮らしぶりに「けっ」とか思うわけですよ。なんだかきれいすぎますよね。

どちらかといえば、参考にしたいのは『徒然草』の吉田兼好の態度でしょう。

観察者の兼好法師は、死について

「命長ければ辱（はぢ）多し。長くとも、四十（よそじ）に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」

と書いている。長生きすると恥がおおくなる、遅くとも四十くらいで死ぬのがいいよね、と。そのあとは醜くなって、恥をかくこともどうでもよくなって、そうなったらもう人間じゃねえ、くらいのことを書いている（第七段）のだから、本人は70 過ぎまで生きたと言われる。さすがです。全然40 じゃないじゃん！

猫に憧れつつ、人間のどうしようもなさを受け入れ、迷惑のかからない道を選んでいきたいものです。それが生き物としての希望なのかな。

伊藤ガビン（いとう・がびん）

1963 年生まれ。編集者。25 年発売の『はじめての老い』（P-Vine）の著者。京都精華大学メディア表現学部教授。編集の名の下に、サイト構築から映像制作等、雑多な仕事をやっております。レシピ本を読み物として読むのが趣味。マガジンハウスの Tarzan web で「老いと表現」を連載中。

「老いと表現」（Tarzan web）

<https://tarzanweb.jp/series/aging-and-expression>